

新井中央小だより

ホームページ <http://azalea.ac.city.myoko.niigata.jp/araich-s/otayori/index.html>メールアドレス chuou@ac.city.myoko.niigata.jp

No. 291

2024 (令和6) 年2月26日

この2月はインフルエンザの流行により、多くの学年・学級で閉鎖措置を行わざるを得ませんでした。罹患して辛い思いをした子どもたちは勿論ですが、各ご家庭にも大きなご負担をおかけしたと存じます。そんな中、ご理解とご協力をいただき、誠にありがとうございました。

無償の愛

我が子を有毒な薬で中毒死させた疑いで両親が逮捕される、しつけと称した虐待で我が子を死なせる等、胸を締め付けられるようなニュースを見聞きする日が続いています。そして、それは氷山の一角に過ぎず、程度は違えど、辛い思いをしている子どもは、今も数え切れない程いるに違いないとも思います。そうなるに至った事情・背景等を知らぬまま、ただ無責任に批判するのも如何なものかと思いつつ、子どもへの愛情について、自分の思い描くものが全てではないことを思い知らされます。

かくいう私も、実は四半世紀も前、子育て真っ最中の時期にある絵本を手にして、「いや、いくらなんでも」と、愛情について自分の気持ちを收拾できなかった記憶が、ずっと心に引っかかっていた。先般、新しい家族が増えたこともあって、久方ぶりに読んでみたくなり、当校の小林司書に訊いてみたところ、図書館の蔵書の中からあっけなく見つけてくださいました。

その本が、この「おおきな木」(原題「The Giving Tree」直訳すれば「与える木」となるでしょうか)です。シェル・シルヴァスタインが書いた絵本で1964年にアメリカで出版されてから60年以上、世界的なベストセラーとして今日まで読み継がれています。有名な本ですので読まれた方、持っている方もおられることと思います。同じ作者による「ぼくを探しに」「ビッグオーとの出会い」も私の大好きな絵本です。

未読の方にとって邪魔な情報になりかねないので、ごく簡単に紹介すると、大好きな少年の成長にともなって、少年が欲するものを与え続けようとする木と少年の姿が描かれた絵本です。難しい言葉は使われておらず、小学校低学年でも読めると思います。勿論、年齢なりの受け止めになるとは思いますが、親子で読まれたら、どんな会話になるのか楽しみでもあります。

今回、本当に久しぶりに読んでみて、話を受け止める自分自身の変化に驚きました。25年ほど前に私が感じた「無償の愛はかくあるべし」というようなメッセージ、心に刺さりつつもなにか切なく割り切れない思い、とは違う感慨があります。今は亡き私の両親、可愛がってくれた祖母への「少年」だった自分自身の所業を深く思い起こさせられる経験にもなりました。

なお、今回初めて知ったのですが、15年ほど前に事情があって、この本の出版社も訳者も変わっていました。もしかしたら、受けた印象の違いにはその影響もあったのかもしれませんが。新しい訳者は、あの村上春樹氏。その「訳者あとがき」も素晴らしい内容で、また何年かたったら再びこの本を手に取りたい、何度も読み返したい、と思わせてくれました。

さて、私が個人的に思い入れがある、というだけの絵本の話を書き連ねてしまいました。親子と一緒に絵本を読み何気ない感想をやり取りするという幸せな期間は、そう長くは続きません。絵本から大人が学ぶこともまだまだたくさんあると改めて感じています。(校長 村治 隆夫)

